2A1-NFC-6-4

高齢者グループホームにおける介護者の身体動作

カンファレンスで入居者の行為を記述する動作

Multimodal interaction among caregivers in a group home for elderly

細馬　宏通[*1]
Hiromichi Hosoma

[*1] 滋賀県立大学人間文化学部
School of Human Culture, University of Shiga Prefecture

1. はじめに

認知症高齢者に対する介護場面は多岐にわたり、必要とされる介護方法も個人によってさまざまである。介護者は日々、どのような介護行動が適切かを考え、選び、ときには新たな方法を編み出さなくてはならない。入居者高齢者向けグループホームのカンファレンスにおいてはこうした介護方法が議論されるが、介護者はただ日誌を読み上げるだけでなく，しばしば身体動作を交えながら過去の介護行動を再現する[細馬　10][細馬　印刷中]. 身体動作を伴うこうした議論は、介護者どうしがそれぞれの必要とする介護方法を考え合うことにどのように貢献しているのであろうか。本研究では、カンファレンスにおいて介護者の発話と身体動作によって表現された介護に関する行為を観察し、介護者どうしがお互いの身体動作をいかに参照し、お互いの介護知識を更新していくかを記述する。

近年、こうした相互作用は、参与者自身の動作だけでなく、相互作用が行われている環境に大きく依存していることが指摘されている[Goodwin　00][Streeck　11]。そこで、今回の発表では、特に介護施設の空間に言及する表現を取り上げる。身体動作が参与者どうしの身体動作のみならず、その場の空間配置に関する知識を参照している事例を手がかりに、身体動作の相互作用とそれが営まれている空間との相互作用を考察する。

2. 方法

滋賀県のグループホームAの協力を得て，月例カンファレンスを 2009 年 9 月から 2011 年 12 月までビデオ収録している. この研究では紙幅の関係で，特に 2009 年 9 月のカンファレンスを扱う.

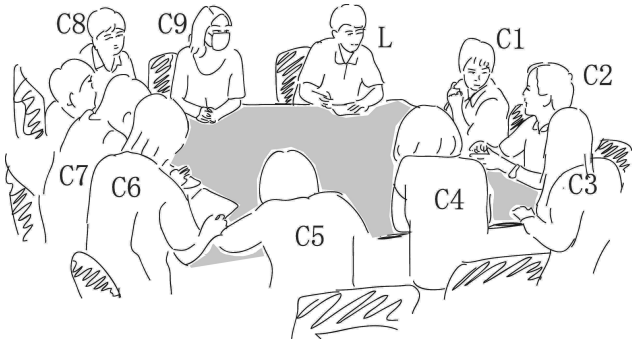

図 1:参加者の配置図

連絡先:細馬宏通，滋賀県立大学人間文化学部，〒522-8533
滋賀県彦根市八坂町 2500，0749-28-8437，
hhosoma@shc.usp.ac.jp

参加者は施設長（L），副施設長(C1)，そして 8 人の介護スタッフ(C2-9)である（図 1）. カンファレンスに用いられる四角いテーブルは，普段は入居者が食事やレクリエーションの際に用いるもので，どの入居者がどの席に座るかは決められている. そのため，介護者は，座席の位置を見ただけで，容易にそこに座るのが誰かを想起することができる.

3. 事例「新聞」

事例「新聞(1)」では，C2 がマツイさんについての報告を行っているところである.

【事例「新聞(1)」】
01 C2 マツイイクコさんですけど
02 C2 あの：：
03　(.)
04 C2 いつもとかわりなくすごしておられると思います
05　(0.6)
06 C2 朝おきられて新聞を読まれている
07　(0.3)
08 C2 あの：：
09 C2 そのときに(.)あの(.)今日も
10 C2 先にイガラシさんに見てもらって：↑
11 C2 あたしはあとでいいから：いうて(.)
→12 C2そのまま：イガラシさんのほうにわたしたりして
13　(1.1)

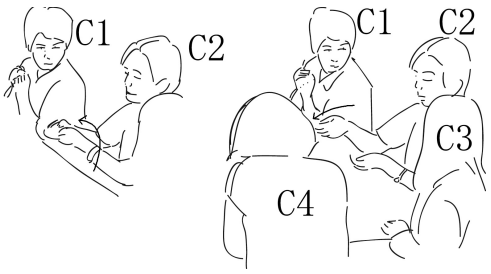

図 2:発話 12 における C2 によるマツイさんの行為の自然記述. 「そのまま：」といいながら C1 の位置に両手を動かし（左図），「イガラシさんのほうに」といいながら右手を C5 方向に差し出す（右図）. C1 の位置はふだんマツイさんの座る席で，C5 の位置はふだんイガラシさんの座る席である.

ここで，C2 は，発話 06 で日誌に目を落としたあと，沈黙 07 で顔をあげ，そこからは日誌を見ずに話を始める. そして，発話 12 で，C1 の位置（普段はマツイさんの席）に手を移動させた

(図 2 左)あと，右手を C4 の左隣方向(普段はイガラシさんの席)へと差し出す(図 2 右).

日誌を参照することを中断して，ジェスチャーによって入居者や介護者の動作を真似るこの C2 の行為は，カンファレンスに典型的なものである[細馬 10]. テキストに書かれ得ない入居者の「新聞をわたす」という身体動作は，C2 のジェスチャーによって的確に表現されている. さらに重要な点は，このジェスチャーが，普段の生活環境を参照している点である. カンファレンスのために座っている介護者の位置を，入居者の位置として読み替えながら，C2 は，生活環境の中でいかにマツイさんがイガラシさんに新聞を渡しているかを表している.

C2 による介護の自然記述の最中，副施設長 C1 はずっと C2 の手元を見ている. しかし，次の「事例:新聞(2)」で，C1 は C6 とともにこの C2 の記述に反対する.

【事例:新聞(2)】
14 C1 うん？
15 C1 いやイガラシ[さんが:さきに]=
16 C6 [イガラシさんがあとや]
17 C1 =マツイさんに渡さはんねんで？
18 C6 ぎゃく[ぎゃく]
19 C2 [あほんま？]

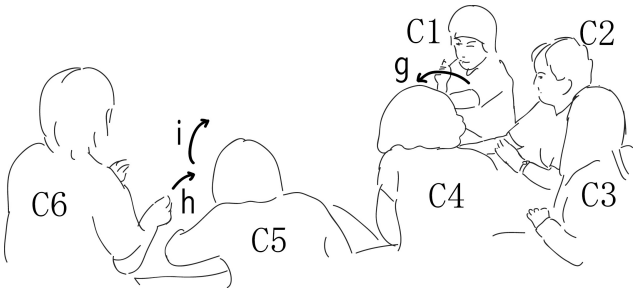

図 3: 発話 15 以降における C1, C6 によるマツイさんの行為の自然記述. C1 は，「いやイガラシさんが:」で C5 の位置(普段，イガラシさんが座っている位置)の方を指す(g). このあと，C1 は発話 17「マツイさんに」で，左手を自分の手元(マツイさんの位置)に引き寄せる. 一方 C6 は，「イガラシさんが」で C5 の位置(イガラシさんの位置)を指し(h)，「あとや」で C1(マツイさんの位置)を指す(i).

発話 15,16 で，C1 と C6 はそれぞれ「イガラシさんがさきに」「イガラシさんがあとや」と言っており，発話内容から見ると全く逆のことを言っているように見える. しかし，同時に起こっているジェスチャーを見ると，一見逆に見えるこれらの発話は，実は同じことを指していることが判る(図 3). C1 は発話 15「いやイガラシさんがさきに」といいながら C5 の位置を左手で指し(図 3g)，発話 17「マツイさんに」で，C1 自身の手元に左手を引き寄せる. 一方，C6 は，発話 16「イガラシさんが」で C5 を指し(図 3h)，「あとや」で C1 を指す. C1 の座席がマツイさんがいつも座っている場所，C5 の座席がイガラシさんがいつも座っている場所であることを知っていれば，二人のジェスチャーはいずれも，イガラシさんからマツイさんへの新聞の移動を示していると理解できる.

C1, C6 は，C2 のジェスチャー方向を反転させることで，C2 の用いた物理的環境の手がかり，すなわち，入居者がいつも座る座席位置という手がかりをそのまま踏襲して見せ，C2 の意見との対比を明らかにしたのである.

4. 考察

入居者の生活空間の中で介護者が話し合うということがどのような体験かを考えるために，いくつかの事例について，そこで行われている発語と身体動作を分析した. 介護者は，いつもそこに座っている入居者と自分たちとを重ね合わせるようにお互いの身体や位置を指し示し合う. 部屋に設えられたテーブルと椅子の配置からは入居者のいつも座る位置が簡単に想起され，この位置は，当のテーブルでかつて行われた入居者の行動を記述する際に用いられる.

入居者の生活する物理的空間内で動きながら，実際の入居者の行為を記述することによって，介護者はいわば，お互いの身体を介して，入居者どうしの感覚を再現し，入居者の生活に近づく. カンファレンスでしばしば繰り返される入居者行動の「自然記述」は，いわば，介護者が入居者の身体をなぞりながら自分との差異に気づき，自らの入居者観を更新していくための方法ではないだろうか.

5. 謝辞

収録にご協力いただいた介護施設のみなさんに感謝します. また，この研究は科学研究費補助金「介護施設において高齢者・介護職員間で交わされる身体動作を用いた空間表現の研究」(平成 21-23 年度)の援助を受けています.

参考文献

[Goodwin 00] Goodwin, C. *Action and embodiment within situated human interaction*. Journal of Pragmatics, 32,1489-1522, 2000.

[細馬 10] 細馬宏通, 中村好孝, 城綾実, 吉村雅樹: グループホームでの介護者間の身体動作を産み出す環境 ー カンファレンスにおける語り ー, 社会言語科学会第 26 回大会発表論文集, 2010.

[細馬 印刷中] 細馬宏通: 身体的解釈法 ー グループホームのカンファレンスにおける介護者間のマルチモーダルな相互行為 ー, 社会言語科学, 印刷中.

[Streeck 11] Streeck, J., Goodwin C. & LeBaron, C. (Eds.) . *Embodied interaction. Language and body in the material world.* Cambridge: Cambridge University Press, 2011